

『フリーライター三村山兵悟のトラウマ手帳 — 猟奇栽培 —』

作者 浅羽一

フリーライターみむらやまひょうしの三村山兵悟は興奮していた。これまでも度重なる取材によって世界の裏に隠された様々な「真実」に触れ、その度に数え切れないほどのトラウマを抱えてきたくせに、相も変わらさずこうしてまた新たな「真実」をほじくり返そうとしているのは、ひとえにこんな感覚こそが動機であり理由であり価値であるのだろう。要するに、すでに中毒になっているのだ。酒も煙草も女も――最後は単にこちらが求めても相手にされないだけなのだが――やらない三村山であったが、ある意味でこれこそが最も健全な肉体と精神を一緒に蝕む快楽に違いなかった。

待ち合わせ場所に指定された田舎の駅前で彼を待ち受けていたのは、薄い色の繋ぎを着た、酷く線の細い中年男性だった。全国の中でも特に過疎化が問題になっている町の一つに相応しく、良く晴れた夏の昼間にも関わらず周囲の商店らしき建物は一斉にシャッターを下ろして、そこは眼前の男よろしく薄暗かった。

「Kさん、ですね」

半ば形式的に三村山が尋ねると、男は頬の瘦けた顔をにんまりと歪めて「はい」と言った。おそらく友好的な笑みであるはずなのに、残念ながらそれは見るからに不気味だった。

すでに電話で話していた通り、Kは例の「肥料」を製造している会社の社長だった。ただし、社長と言っても、中小企業どころか零細企業、そののさらに下に位置する小口零細企業と呼ばれる会社に於いては、実際問題、単なる平社員とほとんど変わらない。だから現にこうして社長自らがジャーナリズムなんて鼻で笑うような三流紙くらいにしか記事を載せて貰えないフリーライターの出迎えに来てくれるのだろう。だが、そんな小さな会社であるにも関わらず、いや、そうだからこそ、Kの会社が今や日本全体を揺るがす大ブームの秘密を握っていると言う事実はいよいよ怪しく、また魅力的なネタとして三村山の胸を踊らせていた。

「お昼ご飯は、もう済まされましたか」

（有）△△サービス」とKの会社名がかすれた文字で荷台にプリントされた軽トラックへ乗り込むやいなや、気を遣っているのか、それとも単に取材費で自分の飯代もまかなわせようと考えたのか、彼がそんな事を聞いてきた。

三村山は逸る気持ちを何とか顔に出さないようにしながら「いえ、まだです」と答える。

果たして、Kは「良かった」と言ってきた。だから、三村山は内心で「やっぱりな」と思いつつ、「よろしければお話を伺いながらお昼でもどうですか」と言った。「勿論、お昼代は私が持ちますので。この辺りで何処か美味しいお店はありますか」。

Kの答えは少なからず三村山の予想と距離のありそうなものだった。「いえ、まだと聞いて安心しました。なら、このまま現場に向かいましょう。たまたま仕事が入ったんです」。すでに昼食を用意していたと言うよりも、むしろどうやらKには三村山を食事に誘うつもりなど最初から無かったようだった。それどころか、その口ぶりにはどうも何かを隠している節があった。

三村山は長年の記者としての経験と勘でそう悟っていたが、同時にそこで下手に追究しようともしなかった。最良の取材を実現させる極意とは、こちらの欲しい情報だけを無理矢理に喋らせるのではなく、一切の情報を向こうから喋りたいと思わせることだ。それによって初めて、こちらの知らなかった事実や知りたかった真実、何よりまるで思いがけない秘密を知る事が出来る。

ろくに人気のない田舎道を、旧式のマニュアル車はことさらに安全運転で進んでいく。三村山は助手席から見える町並みと、車内の各所に幾つも置かれた消臭剤を交互に眺めつつ、本当にここは時代に取り残された場所だなど思っていた。

ブームのきっかけは口コミだった。

青い魚を食べたら頭が良くなるとか、豚肉が綺麗な肌を作るとか、ワインの成分が目にはきつと幼稚園くらいから口うるさく言われてきたが、おそらく三村山を含めた大半の人間がそうであるようにその手の話は要するに単なる食品としての常識程度の価値しか有していなかった。そしてまた現にそうだったからこそ、最初に三村山が「最近、もの凄く体に良い野菜が出回ってるらしいぞ」と知り合いの編集者から聞いた時も、「そりゃ、有機野菜や無農薬栽培なんてのが当たり前になってきたからな」としか思わなかった。しかしそんな彼に対して、編集者は「多分、初めからそんな反応を期待していたのだろうが―にやりと口元を歪めて」「そうじゃ無いんだな」と勿体ぶる風に言ってきた。「そんなありきたりな宣伝なんかじゃ無いんだよ。例えば、その野菜を食べると、本当に悪かった視力が回復したり、荒れていた肌が綺麗になったりするんだと」。

それから編集者は「勿論、オカルトとかそう言う話じゃ無くてな」と付け加えてきた。正直、三村山はそれでもあまり気乗りしなかった。と言うよりも、やっぱり「だからそれって当たり前の話だろ」と思っていた。きちんと毎日三食、それも偏食せずにきっちり野菜の栄養分も摂っていれば、健康状態が改善されて肌や目の調子が良くなるのも必然だ。しかし、とは言えそれもまたやはり彼の性分で、「だけどもあ、一度くらいは軽く調べてみようかな」と考えたのも自然な流れだった。少し前にそれまで追いかけていたネタに決着が付いた所だったので、わりと暇であったと言うのも一因だった。

そうして軽い気持ちで取材に取りかかってみると、なるほど、確かに編集者の言った通り、まだまだ静かに、けれど着実に、その不思議な「野菜」の人気は高まり始めていた。それはどうやらとある地方から出荷されている野菜で、例えば目の悪かった人間がその人参を食べると途端に視力が回復したとか、肌荒れと言うよりもいっそ皮膚病寸前だった人間がその白菜やトマトによって滑らかな肌を取り戻したとか、いっそ全身を癌に冒されていた入院患者が毎日の食事の献立をその野菜中心にした結果あれよあれよという間に退院までこぎ着けたとか、さすがに最後の話みたいの中には大げさすぎてにわかには信じがたい内容もちらほらあったが、だけど同時に全てを単なる「常識」で終わらせてしまうにはあまりにも体験談や感想の密度が常識を越えていた。

三村山は直感した、これは何かある、と。それはもしかしたらその野菜の栽培に何らかの農薬や薬が使われていることが原因かも知れないし、或いは巷に良くある詐欺まがいの健康食品や栄養食品の販売に似た事件なのかも知れないし、はたまたもつと科学的で進歩的な真相が隠されているのかも知れない。精神的な拠り所としての宗教こそ否定しないもの、この世に真の意味での超常現象や神秘的な物語など悲しいかな存在していないと悟っている三村山にとって、そうと決まれば後は単純な話だった。

三村山はとりあえずその野菜を取り扱っている店を調べ、手当たり次第に取材を申し込

んだ。奇妙な事に、それは決まって個人経営のスーパーや自営業の八百屋ばかりで、大手チェーンの量販店や百貨店などは皆無と言って良いほどその野菜を仕入れていなかった。しかし、その理由はじきに判明する。供給量の問題だった。要するに、その野菜を生産している農家ごく限られていたのだ。詰まる所、それはある意味で一般的に出回っている契約農家の有機野菜と同じようなものだった。

そこで、三村山や息つく間もなく今度は片っ端から電話を掛けまくった。相手は勿論、その限られた農家だ。だが、問題はそこからだった。

見事なまでに、全員が三村山の電話取材に対してNGを突きつけてきた。「うちは普通の農家で、何も特別な事なんてしていない」。彼らの返答は等しくそれだった。

いよいよおかしいと三村山は考えた。仮に、本当にそうであるのなら、むしろ反対に取材に応じて良いはずだ。こちらは特別に農薬や科学肥料の問題をあげたらおうとしているわけじゃなく、ただあるがままに取材をして、またその結果にやましい部分がないのであればいっそ彼ら自身の野菜の宣伝にも繋がるのだから。

生きる為、食べる為、とつくの昔に資本主義という名の悪魔へ売った記者魂と引き替えに肥大した好奇心に火が点いた。そして三村山は三流どころか四流、五流の記事でも書いてきた中で学んだ鉄則に従って行動した。つまり、衝撃的な「真実」は全てを正当化する。

我ながらクズみたいな人間の思考だと三村山は自覚していたし、実際その通りだと取材対象から非難される事も多々あったが、同時に大衆はそれによって白日の下に晒された真実に歓喜するという事実も理解していた。感動ではない。だけど構わない。いわば彼らはリサイクル業者だ。要するに裏方だ。何でもかんでも欲しがるくせに自ら泥にまみれる事は忌避したがる一般大衆に代わって、汚れを引き受け、都合の良い所のみを美味しく切っ提供する職人だ。そして職人にとって重要な事は、自分自身が己の仕事に納得しているかどうかと言う事だけだ。その点、三村山は完璧なまでに職人だった。

三村山は直接に農家へと出向いた。電車を乗り継ぎ、バスを使い、タクシーさえもろくに見つからない田舎町で、あらかじめ目星を付けていた数件の農家の下を巡り歩いた。結果、話を聞かせて貰うどころか自身の挨拶を聞いて貰う間もなく追い返された。だが、当然ながら三村山はしつこかった。

ジャンルで戦うゲリラ部隊よろしく朝から晩まで同じ畑の傍で隠れる事もあった。時には対テロリストの特殊部隊さながらに農家の倉庫へ忍び込みそこに保管されている肥料や農薬の一部を無断で拝借した。いっそタレントの痴話喧嘩を飯の種にする芸能レポーターみたいはその農家の主人や嫁、まだ幼い息子に至るまで徹底的に尾行してとにかく何でも良いから話を聞く為の手段になりそうなネタを探した。言うまでもないが、金も使った。

否応なく余所者が目立つ土地に於いて、ましてや三村山のような存在は下手に隠れてもあつという間に住民に知れ渡る。だから彼はむしろ逆にあからさまな程「客」として振る舞った。フリーライターの三村山にとって取材の為の予算なんてものは出来上がった記事が売れて初めて発生するものだから、根城こそ地元のカプセルホテルだったものの、とにかく酒も飲めないのに都会じゃチャージ料が0円でも流行らなさそうな飲み屋を梯子し、自分と同年くらい「若い子」がいるスナックにも顔を出し、胃から立ち上ってくる酒の臭いにさえ酔いそうになりながら早朝の市場へ足を運んで顔を繋いだ。

ようやく価値の有りそうな話を教えてくれたのは、とある農家の組合に所属する男だっ

た。彼は絶対に自分の名前を出さない事と、行きつけの飲み屋のツケを三村山が肩代わりする事を条件に、最近彼らの間で密かに流れているらしい噂を話し出した。それは、ある特別な「肥料」に関する噂だった。

「俺も実物は見た事無いんだがね、一部の農家の間でどうも恐ろしく栄養価の高い肥料が出回ってるらしいんだよ。勿論、一般に流通しているものじゃない。まあ、だからって違法ってわけでも無さそうな感じなんだが。ただ、そいつを使って野菜を育てると、あんたが狙ってる連中が作ってるような特別な野菜が出来るそうだ」

本音を言えば、三村山は最初、何とも頼りない話だと思った。支払った金額を考えればとてもじゃないが割に合わない。だが、彼はすぐさまある事を思い出し、改めてその男にそれを尋ねた。

果たして、男は三村山が差し出したメモと、それから数種類の粉末を見た直後、ほんの一瞬だけ驚きと軽蔑が入り混じったような眼差しを浮かべてから、やがてメモの一部とその内の一種類を交互に指差して言った。「こんな名前の肥料の製造元は聞いた事がねえな」。三村山が男に見せたのは、ある農家から無断で拝借した肥料のサンプルと、その際に書き写してきたその名称及び製造元の会社名だった。

「なあ、あんた。良ければもう少しそいつを分けてくれないか。あの連中、〇〇（組合の名称）に所属せずに、そいつを独占しているんだよ」

言うまでもないが三村山は男の申し出を断った。彼はあくまでも記者であり泥棒ではない。すると彼はあたかも最初から分かっていたと言う風に「なら良いよ」と諦め、それから「それにまあ、どうせ時間の問題だしな」と言った。

「こんな田舎ですつと勝手にやっ行って行くなんて無理なんだよ。仮に何か新しい事をやるにしたって、持ちつ持たれつ、結局はそれが唯一みんなを幸せにしてくれるやり方なんだ」三村山の耳に、それは負け惜しみでなく本当に素直な意見として聞こえた。三村山は声に出さず、いかにも閉塞感に満ちた土地に相応しい諦めだと思った。

ホテルに戻った三村山は土管じみた空間で今後の計画を練った。いよいよ取材も大詰めを迎えようとしていた。だからこそ失敗は出来なかった。そこで彼はとりあえず一度、都会にいる仕事仲間に連絡して対象の会社に関する情報を集めて貰った。そうして得られたものは、まるで農業や化学系の分野とは関係なさそうな企業の実態だった。有会社△△サービス（仮名）は、ある地方に事務所を構える社長以下社員計五名の小さな会社で、清掃業を主な業務として掲げる俗に言う所の何でも屋であり、もっと端的に言えば特殊清掃業者だった。つまり、彼らは時として事件や自殺、はたまた孤独死などの舞台となった現場も清掃するのだ。

三村山は驚いた。そして同時に興奮した。これまでも特殊清掃員と接する機会は何度かあったし、たまたま派遣される先が異なるだけで彼ら自身はその多くがごく普通の清掃業の人間らと何ら変わらないと言う現実を知っていたが、それでもこんな所でいきなり出て来られると、この畑には何やら得体の知れない秘密の種がまかれていたんじゃないかと言う気になってくる。オカルトよりも神秘よりも、表に出ない現実の方が遙かに恐ろしくて、生々しくて、また鮮やかなのだ。

結論から先に言えば、三村山の取材の申し込みはあまりと言えばあっさり受け入れられた。それはもう三村山が拍子抜けするほどで、電話口に出た社長のK氏は三村山がどう

やって自分の会社を突き止めたのかすら尋ねようとせずに「どうぞ」と言った。むしろ、彼の口調や声音ににじんでいたものは、後ろめたそうな気配や焦燥感などでなく、いっそ自信と誇らしさでも言った方がしっくり来そうな雰囲気だった。それだけで三村山はこの取材対象もまた何かしらの職人であるのだと悟り、だからこそもしかするとここからが最も難しくなるかも知れないと思った。

「どうぞ、これに着替えて下さい。臭いが付くとなかなか取れませんから」

現場に到着するやいなやKがトラックの荷台から取り出してきたのは彼や、すでに集合していた社員らが着ているものと同じ繋ぎと帽子、それから厚手の長靴とゴム手袋だった。三村山はそれを心から有りがたく受け取り、トラックの陰に隠れてさつと着替えた。それほど敏感でないにも関わらず、助手席の中にいる時からもう三村山の鼻の粘膜は辺りに漂う臭いを捉えていた。Kが言った「昼食がまだで良かった」に嘘や他意は欠片も無かった。

「吐きそうになったら、すぐに外に出て下さいね。中で吐くとその分余計に仕事が増えますから」

Kの言葉は彼以上に青白い顔色になっていた素人への気遣いと言うよりも、ただただそのままの意味であるのだろうなと三村山は理解した。冷たいとは思わなかった。それよりも「吐かないで下さい」と言われる方がきつと何倍も辛かった。

「さて、それでは行きましようか。繋ぎのポケットにマスクが入っていますから、三村山さんもして下さいね」

三村山はKに言われるまましっかりとマスクをし、Kと他二名の作業員に数歩ほど遅れて付いていった。道の先の見るからに古そうな木造の家は所々が傾き変色している上に、一番近くの家でも二十メートルは歩かないと呼び鈴を押せないと言う立地条件も相まって、本当にこんな場所に人が住んでいたのかと驚きを通り越して呆れてしまうほどだった。

「大丈夫ですか」

と、そんな感想を抱いていた三村山の表情をどういう風に受け止めたのか、彼の前を歩いていた作業員の男性が心配そうに聞いてきた。「あまり無理しないで下さいね」。そう言う彼はマスク越しにも分かるくらいなかなかの男前で、またKとは対照的ながっしりとした体格をしていた。いや、彼の前で清掃道具を載せた台車を押しているもう一人の若者も大柄でこそないがそれなりの体つきをしている事を考えればやはりKが細すぎるのだろうか。「いつもこんな明るい時間帯に作業するんですか」

折角、声を掛けてくれたのだからと、三村山はいつでも会話を切り上げられそうな話題を選んで話し掛けた。すると彼は「まあ、場合にも寄りますけど」と軽く笑った。

「今回はこんな状況ですからとにかく早くしてくれて頼まれましたし、それに、社長が記者さんにもこの方がちゃんとして見て貰えるからと」

「私の為、ですか？」

「勿論、依頼者のご遺体が最優先ですけどね。あ、そろそろすいません」

そう言うやいなや、瞬間的に彼の表情から笑みが消えた。そして代わりにとっても真剣な様子でKらに並ぶ。

ガラスの引き戸の前に立ったKは三村山を振り返り、「本当に、よろしいですね」と言

った。三村山は無言で頷いた。今さら引き返せるわけがないだろうと三村山の中にある記者の部分が言っていた。十秒後、やっぱり引き返せば良かったと三村山の中にある残りの部分が泣きそうになった。立て付けの悪い引き戸の向こうは一言で表せばゴミ屋敷だった。扉を開けた途端、さらには白いビニール袋を内から緑や黒に染めるゴミをかき分け室内へと足を進めるたびに、それまで以上の腐臭が襲ってきて、三村山は合計で三度、吐いた。最初が扉を開けてすぐ、一度目が奥の部屋で畳に敷いた布団の上に転がる遺体を見た瞬間、そして三度目は神妙な面持ちで手を合わせていた彼らがいよいよそれを動かそうと持ち上げた直後だった。四度目以降が無かったのは、単に胃袋の中から胃液さえ無くなってしまったからだだった。

台車から持ってきた袋に遺体を詰め、それを運び出せるようにゴミを片付けていく。慣れた様子でできばきと働く三人とは対照的に、座り込む事さえ出来ず部屋の隅っこで壁により掛かっていた三村山は、一体何の意味があつてこんな惨状を見せられているのかと、一瞬、自分から取材を申し込んだ事を棚に上げてKを恨んだ。だが、そんな三村山の内心をあたかも読み取ったかのごとく、遂にKが例の真相への手掛かりを口にした。

「ほら、これですよ」

そしてそんな言葉と共に、あろう事かKは遺体の眼窩に溜まっていた蛆を一匹、器用にゴム手袋をしたままつまんで三村山に掲げて見せた。

「何ですか、それ」と三村山は聞いたつもりだった。実際はまともに声になっていなかった。だが、それでもKは律儀に答えてきた、「材料ですよ」と。

この男はさっきから何を言っているのかと思考の停止しかかった脳みそで考えた三村山は、次の瞬間、それまでの気持ち悪さや不快感の一切を忘れて「まさか」と叫んだ。

果たしてKは「はい、その通りです」と、あたかも缶詰工場の見学に訪れた小学生にツナ缶の製造工程でも説明するかのような口調で言った。「これが、例の肥料の材料ですよ」。それからKは、勢いよく稼働するベルトコンベアの前に居並ぶ作業員めいた手付きでそれを元あつた場所に戻すと、続けて今度は再び案内人じみた口調で「これを集めて乾燥させて、粉末にした後で殺菌して、そうして出来上がりです」と言った。他の二人はそんな彼らを気にした風もなく淡々と作業を続けていた。

「…一体、どうして」

三村山は驚愕なのか恐怖なのかそれとも別種の興奮なのか自身でも判然としない動悸を感じながら、そう言った。

するとKはそれを勘違いしたらしく「すいません。殺菌の方法は企業秘密なんです」。

「いや、そうじゃなくて」と三村山は即座に否定し、改めて「一体どうして、そんなもので肥料を作ろうなんて思ったんですか」と問うた。冷静に考えればとりあえずその手の質問はもっと後で、少なくともこの家を出て落ち着いてからでも良かったはずなのだが、三村山はもう待ちきれなかった。

Kの返答は「医食同源ってご存じですよね」だった。

「実は私、こう見えて昔からあまり体が強い方ではありませんで」

三村山は笑わない。Kにもまたそれを下手くそな冗談として言った様子は無かった。だからこそ三村山は笑えなかった。

「記者なんてお仕事をされてるんです、聞いた事あるでしょう。例えば肝臓が弱っていれ

ば他の動物の肝臓を食べれば良いとか、心臓を食べれば心臓に効くとか。要するに、それですよ」

全くもって意味が分からなかった。それと蛆と野菜の肥料とどう繋がるのか三村山には見当も付かなかった。：いや、違う。三村山の頭は、実はすでに思考を始める用意を済ませていた。彼がその気になればいつでも情報を整理し、推理し、やがて道理と倫理を無視してひたすら論理的に回答出来た。だから、言ってしまうえば認められなかっただけだ。取材の一環として例の野菜をすでに味わっていた三村山の内臓が、とっくに消化して吸収してしまったそれらを無理矢理に排出しようとしているみたいに、ごろごろと音を立てて激しい腹痛を誘発した。

「さすがにご遺体を直接に：なんて事は人として許されません、決して。ですが、もしもそれが自然に発生した蛆であれば？肌の上に群がっていた蛆は肌を食べているでしょうし、目や鼻の所に溜まっている蛆はそれらを、内臓の中なんてそれこそ栄養の宝庫です」

「あんだ、正気か。そんなもんすりつぶして野菜に振りかけて、それで本当にそんな都合良く葉みたいな野菜が出来上がると、本気で信じてるのか」

「さあ、どうでしょう。でも、確かに出来上がった肥料は栄養価の高いものですし、また現にこうしてあなたみたいの方がこんな片田舎へわざわざ足を運んでくるほどの反響もありますし。それに、私たちが契約している農家の方も皆さん大変に喜んでくれていますよ」

「ウジ虫が材料だって言うのにか」

「そう言いますけど、蜂の子だって見た目は似たようなもんじゃありませんか」

「珍珠とゴミを一緒にするなよ」

三村山はそれこそ苦虫を嘔み潰したような顔で呟き、通りで取材を拒否するはずだと今さらながらに納得した。こんな話が表沙汰になれば、野菜が売れなくなるどころか、近隣の農家、いや、いつそ地域全体が異常なものとして糾弾されるだろう。それだけじゃない、日本中にいる他の特殊清掃業の人間にだって多大な迷惑を掛けるはずだ。

三村山の中で、沸々と怒りが込み上げてきた。

「あんだ、俺がこの話を記事に出来ないって、そう考えてたからこんなにもあつさりと取材を受けたんだな」

何と言う侮辱だろうと、三村山はそれまでの動揺を吹き飛ばしてしまいうくらいに強く思った。確かに、あまりと言えば酷い「真実」だ。これを公にすれば間違いなく大問題になるだろう。それこそ事件や自殺を問わず世の中に遺体が急増するかも知れない。

だが、それがどうしたと言うのだ。

三村山はフリーライターだ。それも完璧なまでにそうなのだ。だとすれば、どうして彼が書かないわけがあるだろうか。

「：俺は、書くぞ。きっちり何もかも一切の容赦なく全てをおおっぴらに」

三村山は宣言した、本気で。そして間違いなく記事にすると誓った。

「お好きにどうぞ」

しかしKはまるで問題なんて無いとばかりにそう言った。覚悟を決めた三村山が逆に滑稽になってしまうほどあつさりとした態度だった。

「私はね、三村山さん。最初からあなたが書くのを諦めるだなんて、そんな事はちっとも考えちゃいませんでしたよ。あなたが今も逃げずにこうしてこの場にいる、それだけでも

う十分です」

そう語るKの表情は、マスクの向こうにあっても関係なく、最初に出会った時からずっと変わっていないのだと三村山はようやく気付いた。

「でもね、だからこそ、気の毒だ」

変わっているものがあつたとすれば、それは唯一、その眼差しが放つ雰囲気だった。

「実を言うと、こうして全てをお見せしたのは罪滅ぼしみたいな所もあるんです」

三村山はこれまでの経験から、その雰囲気の意味を悟っていた。それは、同情だった。「あなたはきっと全てを書くでしょう。でも、それを記事として載せてくれる出版社はきつとありません。いえ、プライドを持った出版社ならば、もしかしたら雑誌に載せてくれるかも知れない。そちらの業界については詳しくありませんが、商品自体は出来上がるかも知れない。でもね」

Kはそこで一度、深く息を吐いた。それはとても長い長い溜息だった。

「残念ながら、それは一般の人の手元にまで届く事はきつと、いえ、間違いなくありません。何処で道が途切れるのかは知りません。でも、必ず何処かで道は途切れる。だって、誰でも我が身が可愛いですから」

「Kさん。それは、圧力って意味ですか。だけど、失礼ですが、あなたにそんな力があるようにとはとても……」

「はい、私にはそんなものありません。私の会社だって吹けば飛ぶようなものです。いや、それはこの地域全体に言える事です。でも、だからこそ、なんです」

「だからこそ、何なんですか」

「ご存じですか。この町で年間に孤独死する人間の数。自殺でも自然死でも構わない、こうして私たちの世話になるような方々の数。事件なんかほとんどありません。なのに、こうして寂しく亡くなっていく方々の数はあまりにも多い。それってつまり、もうこの町が終わっているって証拠なんです。若者は出て行き、老人ばかりが残される。そして老人は若者を頼って町を出るか、ひっそりとこの土地で死んでいく。詰まる所、いずれにせよ遠からずこの町の人口は限界を下回るでしょう」

「それは、確かにそうかも知れない。だが、それと、この話と、一体どんな関係が？」

「持ちつ持たれつ、なんです。例えば、私たちが無償でご遺体の世話をする。亡くなられた方は、自分達の亡骸がどうなるか分かった上で、我々に後の事を頼む。そして私の会社はそうやって利益を上げて、食いつなぐ」

「まさか、地域ぐるみでやっている？」

到底受け入れがたい話だったが、三村山には今さらKが嘘を吐くとも思えなかった。何故なら、Kの眼差しは変わらなず同情の色を浮かべていたからだだった。

「いえ、少し前にようやく私たちの行いが認められました。まあ、と言っても、あくまでも一般の方には知られやしません」

「嘘でしょう？こんな話を、町や県が」

そう言う三村山の前で、Kが無言で人差し指を数回、目の前の空気をくすぐるように動かして天井を示した。

「……まさか、国？」。それに思わず三村山が失笑しそうになりつつ聞く。

果たして、Kはこくりと頷いた。その目は「ですから、言ったでしょう」と語っていた。

「そんな。国がこんな事を認めたなんて……」

「勿論、最初は無理でしたよ。でも、幸いにして、野菜の評判がすこぶる良くて、売り上げも驚くほど好調でした。まだまだ供給量が足りていませんが、先日、一足先にとある有名百貨店との契約も結べたくらいです。あ、先方には当然ながら野菜の秘密は秘密のままですよ？」

そしてKは確かに「超」の付くほど有名な大手百貨店の名を挙げる。昨今の不況も関係なく業績を伸ばしている、国からの天下り人員も大勢抱えている大企業だった。

「そんな話に加えて、さらに地方の指定する団体や組合へうちの肥料を提供すると言う条件で、何とかまとまったんですよ」

Kは語る、肥料の材料ならまだまだ沢山あるからと。それによって少しでも自分達だけでなくこの地域に住む人間が楽になれるだろうと。何より、野菜を望んでいるのは他でもない日本全国の一般人だと。

三村山はもう何も言えなかった。聞きたい事ならば全て聞いた。知りたいたい事ならば全て知った。ただ、言いたい事は山ほどあったのに、何も一つとして言えなかった。書きたい事はさらにその倍ほどあって、実際、彼は書くだろうが、まともに表へ流れる内容はやはり一つとして無いだろう。

「この仕事を始めてつくづく思いましたよ。食の安全なんて言いますが、そもそもその基準を決めているのは我々消費者でなく供給者、或いはそれを認可している国なんだよね」

三村山は思った、Kの言葉こそ「真実」だと。農薬、工場排水、放射能、食品添加物、他にも何だかって構わない。それらはしばしば危険だ何だと騒がれるが、それらは国が「危険」だと認めて初めて「危険」になるのだ。喻えどれだけ人身に有害な物質が含まれていて、人心に悪影響を及ぼすであろう要因が潜んでいても、それが「安全」の基準内にある限り、誰がどれだけ大騒ぎしようとも基準自体が改変されるまでは「安全」なままでのだ。

「あの」と、唐突に声がして三村山は酷く億劫な気分ですちらを見た。そこには作業員の二人がいて、彼らの背後には玄関までの道筋が綺麗に出来上がっていた。

「とりあえず行きましようか、三村山さん。残りの清掃と消臭は改めて行いますから、とりあえず今の所は先にご遺体などを運び出しましょう」

社長として、職人として言うKを、三村山はもう止めなかった。そして彼は担架に乗せられてとても丁寧に運ばれていく名も知らぬ老人の後に続いてKと共に家を出た。玄関を出る時、ふと彼は振り返ってみたが、当然ながら彼らを見送ってくれる人間は誰一人としていなかった。

結局、取材を終えて帰ってきた三村山は宣言通り全てを記事にまとめて幾つかの出版社へ持ち込んだ。けれどその瞬間の編集者らの反応こそ凄まじかったものの、後日、名のあがる所からは一様に「こんな出鱈目な都市伝説はうちじゃ載せられない」と返事があった。辛うじて彼の記事を掲載し、僅かながらも金を支払ってくれたのは、やはりと言うべきかもっぱら芸能人のゴシップやオカルティックな都市伝説やまたアウトローの特集ばかり組んでいるいつもの三流紙だけだった。悲しいかな、彼は自身が食っていく為に、ようやく手に入れた「真実」を今回もまた虚飾として売った。そしてその代償に、彼はまた一

つ新たなトラウマを抱える事になった。あの日以来、彼は野菜を一切食べられなくなった。三村山は考える。こうして世界の真実を知っていくたびに、自分は少しずつ欠けていくと。だとすれば、自分がいつかこの世に潜む真実の全てを知ると、自分の存在が跡形もなく消えてしまうのでは、どちらが早いのだろうか。

勿論、そんな事とつくに三村山は分かっている。だけど、それでも止められないのだ。そして止められないからこそその中毒であり、快楽である。

だからまた今日も三村山は真実を求めて飛び回る。

とどのつまり、彼にとってジャーナリズムなんてものは最初から他の誰でもなく世界で唯一自分の為だけの手段なのだ。

〈了〉